

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 劉 姣
学位 博士 (学術)
学位記番号 新大院博 (学) 第 7 7 号
学位授与の日付 平成 2 6 年 3 月 2 4 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
博士論文名 憎悪から模倣へ
—ハリウwoodsの英雄物語における日本表象—

論文審査委員 主査 准教授 石田 美紀
副査 教授 佐々木 充
副査 准教授 猪俣 賢司

博士論文の要旨

ハリウッド映画には、白人男性主人公が日本を訪れ、そこで「悪」と格闘する物語類型が繰り返し、登場する。このように日本表象を用いる「白人英雄物語」は、政治的・社会的・経済的・文化的な諸力学が複雑に作用した結果の産物であり、いかに不変に見えたとしても、そこにはつねに変容が存在する。本論文では、日米関係が変化した時代(第二次大戦期、50年代の冷戦期、80年代のバブル期、21世紀初頭のグローバル期)を選び、各時代において興行的に成功したハリウッド映画が日本表象をいかに利用し、自己と他者を切り結ぶ装置として機能させてきたのかを明らかにする。構成は以下の通りである。

序章 はじめに

第一章 第二次世界大戦によるアジア表象の変化

—日本と中国、戦時ハリウッド映画『パープル・ハート』を通して

第二章 「真」の女性と「真」の男性

—『東京暗黒街・竹の家』における日本人女性像及びアメリカ人男性像

第三章 両義の日本・両義のアメリカ

第四章 アメリカの関心の変化・アジア側が作った自我像へ

最終章 模倣される日本

—『キル・ビル vol.1』における日本ポップ文化

参考文献

序章では、映画黎明期において、日本がどのように表象されていたのかを確認する。19世紀末の映画誕生から、日本は西洋にとってエキゾチックな被写体であった。20世紀初頭、ハリウッド映画産業がアメリカ西海岸に誕生すると、日本人俳優・早川雪洲が危険な魅力に満ちた日本

人を演じてスターになるように、日本は西洋を誘惑する東洋的他者としての役割を果たした。とはいえ、当時成立した悪魔的な日本人は中国人と区別されてはいなかった。日本が固有の表象を得るのは、第二次大戦開戦前後である。

第一章では、戦時情報局の指導下で製作された抗日プロパガンダ『パープル・ハート』(1944)を分析する。日本はアメリカ社会における潜在的な悪から、残忍で狡猾な顕在的な敵に変化した。アメリカ国民が一丸となり倒すべき強敵という新たな表象が日本に与えられたとき、中国は友邦となる。結果、アメリカ白人男性は弱者・中国を助ける英雄として雄弁に表象される。しかし、敵としての野蛮な日本は、第二次大戦後には姿を消す。

第二章では、朝鮮戦争後の冷戦初期に公開された『東京暗黒街・竹の家』(1955)を分析する。この映画は女性嫌悪を特徴とするフィルム・ノワールに属しつつも、アメリカ人白人男性と日本人女性の恋愛成就によって終結する。異人種間の性的結合を禁じるプロダクション・コードに違反する異例の結末は、敗戦以降アメリカに従属する日本の地位と深く関わる。それは、この映画が日本を舞台としながらも日本人男性の存在感が希薄であることから明らかである。女性化された日本、それもアメリカ人白人男性を助ける日本という表象は、80年代の日本の経済的台頭まで続く。

第三章では、高度経済成長の果てにアメリカを脅かす日本をめぐって生み出された表象であるテクノオリエンタリズムについて論じる。バブル経済の頂点である1989年に公開されたフィルム・ノワール『ブラック・レイン』は、そのタイトルが示すとおり、1945年に投下された原子爆弾後に降った黒い雨を想起させつつも、この映画では一転、アメリカを脅かす日本の隠喩として機能している。サイドは西洋が東洋に過去を投影するオリエンタリズムを指摘したが、産業的・技術的革新を遂げた日本には近未来が投影されることで他者化されている。新しい他者を前にして、アメリカ人白人男性は英雄として振る舞うことが保証されていないどころか、良き日本人男性の導きの下でなんとか更生する弱者として提示される。そこには、80年代のアメリカ自身の揺らぎが反映されている。

第四章では、バブルの崩壊を日本が経験する90年代を扱う。この時期、ハリウッド映画における日本表象は鳴りを潜める。しかしながらこの空白は、来る21世紀初頭のハリウッド映画に頻出する日本表象、さらにはアジア表象の準備期間であった。90年代、ハリウッドの外で育ったふたつの映像文化がアメリカ、そして世界に進出していった。すなわち日本のアニメと香港映画である。アジア発であるために、アジア人の自我像ともいべきこれらのジャンルの世界への浸透は、西洋が映像を作り、東洋がそれを受容するという従来の関係を逆転させる契機となった。実際、90年代末から2000年代初頭のハリウッドでは、日本製アニメや香港映画を深く内面化した若い監督たちが活躍している。

最終章では、日本を中心としたアジアの映像文化を積極的に引用することで作家性を築いたクエンティン・タランティーノの『キル・ビル』(2003-2004)に焦点を絞る。日本製アニメや任侠映画、さらには香港アクション映画に全面的に依拠し、それらを模倣するこの映画は、ハリウッドが日本という他者を相手に作り上げてきた英雄物語を脱臼させている。そこには英雄と呼べる男性主人公がいなくて、主人公をはじめすべての女性が戦う。彼女たちはアニメが繰り返し描いてきた戦闘美少女の発展系であり、ハリウッドがアニメを吸収した結果であるといえる。そして、彼女たちを戦いに駆り立てる動機が、男性権力者から受けた抑圧と彼らへの復讐であるため、これまでハリウッドが保守してきた異性愛中心主義と家父長制までもが批判的に問われることになる。

このように、第二次大戦から 2000 年代初頭までのハリウッド映画における英雄物語と日本表象の変遷を追跡することで判明するのは、反復され続けるがゆえに不変かつ普遍に見える白人英雄物語が実は揺れうごき、変容していることである。こうした揺れやぶれは、表現でありつつも、高い収益性を期待される商品でもあるハリウッド映画についての瑕疵であるのかもしれないが、それは映像が製作され、受容される際に生じるダイナミズムを示すものである。

審査結果の要旨

本論文の成果と独自性はまずもって、日本表象という観点から第二次大戦中から現代までのハリウッド映画を定点観測し、あいも変わらず繰り返されている白人英雄物語の変容を明らかにしたことにある。その際、戦争や経済といった外在的要素を映画に直接反映させるのではなく、カメラワーク、照明、セットデザイン、さらには音楽や言語といった映画テキストを構成する内在的な視聴覚要素の詳細な分析を徹底させている。結果、本論文は白人英雄物語が変節する瞬間を適確にとらえ、ハリウッド映画がみせるダイナミズムについての説得的な論証となっている。

とりわけ優れているのは、『ブラック・レイン』の分析である。その理由はふたつある。

第一に、オリエンタリズムという概念の更新を行った点である。サイドは西洋が東洋を利用して自己確認を行う欺瞞を、オリエンタリズムとよび、告発した。本論文はサイドが指摘した西洋と東洋の非対称性を踏まえつつも、映画の肌理に注視することで、還元論的ではない分析をおこなった。

『ブラック・レイン』に登場するニューヨークと大阪の関係については、大変興味深い指摘がなされている。現実とは異なり、大阪はニューヨークを圧倒するほどに発達した都市として登場する。両都市が担う物語上の差異は、主人公のアメリカ人白人男性と、彼と敵対する日本人男性がともにオートバイでそれぞれの市街地を走るシーンとの対比によってさらに強調される。大阪の未来性は白人男性への脅威として立ち現われるのだが、それは従来のオリエンタリズムとは異なる他者性の表現である。従来のオリエンタリズムにおいて東洋には過去が投影された。しかし、この映画が描く日本には産業および技術の過剰発達を徴とする未来が投影されている。それは新しいオリエンタリズム、すなわちテクノオリエンタリズムの発露である。本論文は、このテクノオリエンタリズムを 80 年代以降のハリウッド映画において日本表象を成立させる定数として捉える。それにより、近未来を好んで描いてきた日本製のアニメを積極的に吸収し、引用する現行のハリウッド映画を文化表象史上に位置づけることに成功している。

第二に、映画製作および受容においては重要な役割を果たしているにも関わらず、映画研究においてはいまだに軽視されているスターという要素に着目することで、80 年代ハリウッド映画の新たな側面を発見した点である。『ブラック・レイン』で日本人男性の力に屈し、また日本人男性によって導かれるアメリカ人男性を演じたのはマイケル・ダグラスであるが、本論文は日本を舞台とはしない 80 年代のダグラスの主演作が繰り返しアメリカ人男性の危機を描いたことを重視する。従来、80 年代ハリウッド映画については、強いアメリカを目指すレーガニズムの影響が大きいことが指摘されてきたが、ダグラスのスター・イメージに着目すれば、政治・経済上要請された強いアメリカ像の影で白人男性性の失墜が数多く描かれていたことも判明する。ダグラスが体現する白人男性の脆弱さや傷つきやすさは、『ブラック・レイン』ではテクノオリエンタリズムが生み出す日本という他者と遭遇することにより分節化される。

白人男性を失墜させる『ブラック・レイン』の日本表象が示すのは、西洋の東洋に対する優位をジェンダーとのアナロジーで保証してきたシステムの動揺である。この動揺は、テクノオリエンタリズムと非常に高い親和性をもつがゆえに、その象徴ともいえる日本製アニメから多くを吸収した2000年代の『キル・ビル』においてさらに顕在化する。同作第一部においては白人男性が排除され、第二部においては女性主人公が白人男性を殺害することで決着をみる。白人男性の英雄物語を成立させない『キル・ビル』を、本論文は『ブラック・レイン』の延長とみなし、従来のオリエンタリズムが瓦解する様を呈していると論じている。

このように、本論文はハリウッド映画における日本表象の変化の揺らぎを追い、アメリカにとって日本とは何者なのかという問題を十全に解き明かしている。

最後に特筆すべきは、本論文が中国表象の変遷という、もうひとつの主題を探り当てていることである。1910年代のハリウッドにとって日中はともにアジア的他者として一括されてきたが、1930年代の日本の軍事的台頭により、両者の表象は弁別されていく。本論文は、日本表象の陰画として生み出される中国表象についても詳細に検討し、日米関係がもうひとつの他者表象の生成と直接的・間接的に関係していることを明らかにした。それは、本論文独自の視点であり、グローバル化が進行する現代における文化衝突・交流を考察する上で、アクチュアリティを備えた重要な指摘として評価されるものである。

以上より、本論文は博士(学術)に値すると判断した。